

仏教における霊魂についての一考察

——西山證空浄土教を中心として——

高 城 宏 明

(京都西山短期大学)

一

今回の共同研究課題は「仏教の霊魂観」ということであつたが、ここでは「仏教における霊魂についての一考察」として、仏教の中で霊魂がどのように捉えられているかを考えることとしたが、釈尊の無記をはじめとして、積極的な霊魂観の展開が予測できない中、以下では、とりわけ、西山證空上人（以下、證空）の浄土教における往生観との関係で霊魂なるものが考えられてきたのか、また、考えられてきたとすれば、一体どのように受け取られてきたかを考えることにした。

一般的に、霊魂或いは魂は、生物とりわけ人間が生きている間は体内にあり、生命の源、また、精神そのものとされているものであるが、この生命の根源、精神そのものとされるものは肉体の死を以ても終了することなく、来世で異なった存在となつて生まれかわるといふ輪廻転生の思想との関係で考えられてきたものである。

輪廻転生という言葉は仏教でも広く用いられるものであるが、これに類似する思想はヒンズー教やその他、多くの

宗教にも見られるものである。中でも、ヒンズー教はインドにおいて仏教成立以前にバラモン教として存在し、人間には精神や肉体を超越する、「我」が存在し、それこそが輪廻転生する主体であり、それはまたバラモンの創造主「梵天」そのものだともする梵我一如の心理を示し、人間はこの理を理解できないがために輪廻を繰り返すのだが来世で何に生まれ変わるのかは現世の行い「業」によって決定されると説いているのである。

仏教における輪廻転生の思想はこのようなバラモン教の考え方を受け継ぎ発展させたものであると言えるが、大きく異なる点は、人間にとっての根本を「我」ではなく「無我」としたことであり、このことからすると、人間にとって絶対的なものは何ひとつ存在しないということになる。つまり、仏教でいう輪廻転生の主体は人間を構成する精神でも肉体でもないこととなり、では一体「なに」が輪廻するのかが問題であると言えるのであるが、そのことを考えるためには自分の心や身体は自分のものであるにも関わらず、自分自身でコントロールすることが非常に困難でありと知り、そのような根本的な束縛から完全に解き放たれること、すなわち、解脱を得ることとの関係で考える事が必要ではないかと思われるのである。このような観点に立つ時、過去の生死輪廻から、一転、浄土への往生を説く浄土教にとっては、我々衆生が往生を遂げる主体なるものをどのように捉えれば良いのかを考えることがこれまた必要と言えるが、以下、證空教学における浄土往生思想を中心に論じることにした。

二

「五段鈔」⁽¹⁾において證空は、善導の「観経疏散善義」、深心釈を釈して、

今罪惡とは、五逆・十惡等の罪を言ふなり。五逆とは父母を殺し、阿羅漢を害し、仏身より血を出だし、和合僧

を破るなり。十悪とは、身には殺生・偷盜・邪淫の三つの失を犯す。口には惡口・兩舌・妄語・綺語の四つの罪を作る。意には貪欲・瞋恚・愚痴の三つの惡を發す。此れを十惡と云ふ。此等の罪に依りて無始より已來生死に流轉せり。故に常没常流轉と云ふなり。

とし、その他、「觀經疏自筆御鈔」玄義分卷一には、

分段生死トイハ、界内流轉ノ名ナリ。界内トイハ、三界ヲ指ス。三界ヲ分テ六道アリ。(中略)曠劫ヨリ今ニ至ルマデ、昇沈異ナリト雖モ、流轉止ム事ナシ。⁽²⁾

とするのをはじめ、著書の随所で三界流轉を示している。さらに、このような生死流轉をする理由として、「觀經疏自筆御鈔」玄義分卷一には、

四流、トイハ、三界ノ煩惱ヲ分チテ四トス。四暴流是ナリ。此ノ煩惱ヲ起シテ三界六道ノ業ヲ作リテ、六趣四生ニ輪廻スル事、暴キ流ノ人ヲ漂ハスガ如シ。故ニ此ノ煩惱ヲ指シテ暴流ト云フ。一ハ欲暴流、欲界ノ内ニ於テ起ス所ノ貪、瞋等ノ煩惱ナリ。二ハ有暴流、色、無色界ニシテ起ス所ノ貪、慢等ノ煩惱ナリ。三ハ見暴流、三界ニ通ジテ僻事ヲ思ヒテ四真諦ノ理ニマドフ煩惱ナリ。是ニ付キテ種々ノ不同アリ。四ニハ無明暴流、三界ニ通ジテ諸法ノ相ニマドヒテ闇キ煩惱ナリ。煩惱多シト雖モ、此ノ四ヲ根本トス。輪廻生死ノ基ナリ。此ノ四ヲ越エツレバ、三界ハ離レヌベシ。⁽³⁾

として、欲暴流をはじめとした四暴流を示し、この煩惱こそが生死に輪廻するもといだとするのである。さらに、同じく、「觀經疏自筆御鈔」玄義分卷一にも、

我等三毒ノ煩惱ヲ因トシテ生死ニ流轉ス。然ルニ、三毒ノ中ニハ愚癡ヲ以テ本トス。⁽⁴⁾

といい、また、「般舟讚自筆御鈔」巻第一には、

長没無明海、トライハ、譬ニ寄セテ自是非他ノ貪瞋ノ過ヲ顯ハスナリ。云ク、煩惱能ク行人ヲ漂ハシテ、生死ニ流転セシム。是ヲ海ニ喩フ。煩惱ノ中ニ無明其ノ根本ナリ。⁽⁵⁾

として、我々衆生が生死に輪廻を繰り返す根本が煩惱であるとする上に、数ある煩惱の中でも、とりわけ、意業すなわち、心に巣くう煩惱こそが生死流転の根本原因があるとしている。

また、「五段鈔」において證空は、

四生無常の形、生有る者は死に帰す。哀れなる哉電光の命、草露の朝を待つが如し。悲しい哉風葉の身、僅華の朝にして夕べにいたらざるに似たり。五蘊の仮舎に旅客の主、六趣を指して中有に生を求む。幽魂は無常にして独り逝き代われれば、質は山沢に残り骨を野外に曝す。⁽⁶⁾

とする。ここでは、命のはかなさを説いて、仮に人天二趣の快樂、一旦の名利を得たとしてもそれは夢中の出来事のようにはない幻のものとして三界六道を厭い離れるべきことを勧める段であるが、ここにおいて證空は、人間の構成要素である五蘊、すなわち、色・受・想・行・識たる物質と精神は元来、実体のないものであり、とりわけ、肉体は命を終えれば無惨なすがたを曝すものであるとするが、死者の魂のみが、これもまた儂いながら次の生命を求めて六道をさまようことを示しており、ここに数少ないながら、證空が靈魂に言及する資料を見いだす事が出来るのである。この資料での「靈魂」なる語の使用は、ごく自然に用いられており、このことからすると、證空の生きた時代においては、特別な意識をすることなく靈魂なるものを認めていたのかも知れないとも言えるのである。さらに、「般舟讚自筆御鈔」巻第四には、

分身受報、トイハ、宿世ノ因縁ニ依リテ一所ニ生ヲ受ケ、業ヲ當ミテ居スルハ、一身ノ如シ。業ニ随ヒテ各他所ニ生ズルハ、身ヲ分ツガ如シ。故ニ、分身、ト云フ。或在猪羊六畜内、被毛戴角何時了、トイハ、正シク上ノ、分身受報、ノ相ヲ顯ハスナリ。云ク、其ノ、受報、ノ相無量ナリ。委シク云ヘバ説キ盡クシ難シ。今、牛馬猪羊鶏狗ノ六畜ハ家ニ養ヒテ人皆是ヲ知ル。此ノ六畜ノ内ニ於テ父母妻兒等ノ生ヲ受ケタル、互ニ知ル事ナクシテ、或ハ命ヲ絶チテ肉ヲ食シ、或ハ重キヲ負ホセテ鞭打ヲ加フ。是愚癡ノ至ナリ。

として、六道に輪廻を繰り返す中で、前世の行いによって生まれた場所でさらにまた同じ行為を繰り返す存在があることを認め、或いは、曾て、前世に於いて親子や家族の関係があったものが、宿世の行為により家畜となつて生まれ代わり、それを知らずして鞭打ち、労働を負荷し、時には肉として食すことのあることを述べて、ここに漠然とではあるが、現世での死語には肉体ではない何らかのものが残り、再び次の生命を得ることを示すとともに、これら一連のつながりは宿世の煩惱、とりわけ意業たる愚癡がもととなつてゐる事をも述べるのであり、ここでも現世における心の作用が来世に対して実に重要であると考えられていたことが伺えるのである。

このように、生死流転を繰り返す間には靈魂の実体が一体何なのかをはっきりと提示する個所を出すまでには至らないにせよ、少なくとも肉体以外の何らかが残ると考えられているようであり、このことは浄土往生を説く證空浄土教において、浄土に往生する主体が何なのかを考える事とも密接な関係があるのではないかとも思われるのである。

三

證空教学に於ける衆生の救済を考える時、そこに目的とされるものは決してここまで見たような生死輪廻に身を委

ねることをただ肯定するのではなく、あくまでも浄土往生にこそ最大の目的があるわけであるから、次に、この生死輪廻を断ち切る方法を通じて、浄土往生との関わりから往生の主体について考える事にする。

證空は、「観念法門自筆御鈔」巻上において、

三昧、ハ梵語ナリ。ココニハ、調直定、トイフ。是ハ、凡夫妄心ヨリ惡業ヲ造リテ、業ニ依リテ六道ニ輪廻シテ其ノ心イヨイヨ曲レル事、蛇ノ歩ク時正シカラズシテ曲リ行クガ如シ。カカル心ヲ具セル凡夫ヲ捨テズシテ引接シ給フ大慈大悲ノ本願、是ヲ調ヘ直ス事、蛇ヲ筒ニ入レテ直ク為スガ如シ。⁽⁸⁾

と述べて、ここに六道輪廻を繰り返す我々凡夫の心の散乱や曲りを調えるのは我々自身ではなく、弥陀の本願にある事を示している。さらに、「観経疏自筆御鈔」玄義分卷一には、

浄土ヲ欣フ智恵ノ志ニアラザルヨリハ、生死ノ根源タル煩惱ヲ断ズベカラズト云フナリ。浄土ヲ欣フ智恵ノ志トイハ、今ノ観門ヲ指スナリ。⁽⁹⁾

とし、また、「般舟讚自筆御鈔」巻第四にも、

順随仏語見弥陀、トイハ、釈迦ノ説ヲ指シテ、仏語、ト云フ。是即チ、観門ノ心ナリ。既ニ観門ノ説ニ随ヘバ、弘願ニ帰シテ往生ヲ得ル益アリ。⁽¹⁰⁾

と述べ、「観経疏自筆御鈔」玄義分卷一には、

要門ニ依リテ弘願ニ帰スレバ、常没ノ凡夫報仏ノ土ニ生ズ。⁽¹¹⁾

等とするように、我々凡夫の往生は弥陀の弘願にあり、調機誘引する釈迦の観門を知り、その道理を理解すること、すなわち、絶対他力の領解こそが、我々一切衆生が救われる唯一の道であるとし、そこにはまた、罪惡生死の根源で

ある煩惱断もあるとしているのである。このように、弥陀の弘願により浄土に往生する我々凡夫である、いや、弥陀の弘願そのままが我々衆生の往生であるわけであるが、このことについて證空は、「往生礼讃自筆御鈔」卷三において、

長時永劫、トライハ、カシコニ生レテ後、真実ノ樂生ジテ、一念ノ苦ヲ雜フル事ナク、長時永劫ニ身心安樂ニシテ、成仏ノ時ニ至ルマデ生死ノ果ヲ經ザル事ヲ顯ハス。⁽¹²⁾

として、浄土に往生して身心に安樂を感じることを示し、また、「般舟讚自筆御鈔」卷第四においても、

既ニ生レヌレバ、半座ヲ分チテ昔ノ同行ヲ待ツ故ニ、後ニ生ルル者アレバ、喜バシキ事類ナシ。故ニ、皆歡喜、ト云フ。歡喜ノ心ヲ顯ハシテ、衣服ヲ与エテ著セシムルニ、新生ノ人ノ心ニカナハズト云フ事ナシ。此ノ故ニ隨意著、ト云フ。菩薩声聞將見仏、礼拝一拝得無生、トイハ、歡喜シテ衣ヲ著セ、即チ手ヲ引キテ仏前ニ至レバ、仏ヲ見テ浄土ノ功德ヲ喜ビ、仏ヲ礼シテ仏恩ヲ報ジ、無生ヲ悟リテ生死ヲ悲シミ、利生ノ思ヲ生ズベシ、ト云フ事ヲ顯ハスナリ。⁽¹³⁾

と述べて、あくまでも現世における方便としての擬人化ではあると思われるが、「身心安樂」、「半座を分ちて」、「衣服を著す」、「手を引く」等との表現をすることから、浄土に往生した者にも現世と同様の身体のようなものを認め、浄土に行き生まれる存在が漠然とながら考えられていたものと思われるのである。また、このことは、今の「般舟讚自筆御鈔」にもあるように、「利生」を考える事にも関係するものであると言える。すなわち、「往生礼讃自筆御鈔」卷二において證空は、

又至彼国、ヨリ下ハ還相ノ回向ヲ釈スルナリ。至彼国已、得六神通、トイハ、カシコニ生レヌレバ、天眼等ノ願

成就ノ国ナル故ニ、必ズ六神通ヲ得ル事ヲ思ハヘテ、得六神通、ト云フ。殊更六神通ヲ得ント願フニハアラズ。回入生死、教化衆生、トライハ、マサシキ還相ノ回向ノ相ナリ。云ク、カシコニ生レナバ、穢土ニ還リテ衆生ヲ利益シ、成仏シテ利生ノ願ヲ円満セント思フ所ヲ、還相ト分チ釈スルナリ。⁽¹⁴⁾

とし、さらにまた、「觀經疏自筆御鈔」散善義卷一に、

又言回向、ヨリ下ハ、上ニハ、往想ノ回向ヲ釈シ畢リス。今ハ、又、還想ノ回向ヲ釈スルナリ。還起大悲、トイハ、還、ハ往ニ対スル言ナリ。往ハ往想、是則チ、サキニ明ス処ノ、往生極楽ノ想ヲ作ス、回向ノ義ナリ。今、還起、トイハ、還想ノ義ナリ。既ニ其ノ悟ヲ開キテ、仏位ニ隣リ畢リヌレバ、還リテ凡地ニ同ジテ、利他ノ行ヲ立テ、衆生ヲ度ス。是還想ノ心ナリ。⁽¹⁵⁾

として、ここに還相回向を説き、浄土往生以後に再び生死の世界へと還帰するところにも、何らかのものが浄土を行き来すると考えられてきたと思われるのである。では一体浄土を行き来する何かとはどのようなものが問題となるが、遺憾ながらこのことを解明するに足る十分な資料を見いだすことが出来ないし、これが、本稿で捉えようとしている靈魂であるとも考え難いのである。しかしながら、「觀經疏自筆御鈔」散善義卷一において、證空は、

若有衆生、ヲバ、即便往生、ト説キ、復有三種衆生、ヲバ、当得往生、ト説ク。即便往生ハ、先ヅ弘願ヲ思ハヘテ説ク。弘願ニ乗ジヌレバ、時節ノ久近ヲ論ゼズ、即チ生ズルナリ。当得往生ハ、觀門ノ心ナリ。觀門ハ必ス弘願ニ乗ズルニ依リテ生ズベシ。故ニ、当得ト説クナリ。⁽¹⁶⁾

と述べている。この資料のように、證空浄土教では、一般的な浄土教が当来世の往生を説くのに加え、即便往生を説いて、弥陀の弘願による絶対他力を領解する時を臨終平生の区別無しとして、現生往生を示すのであるが、このこと

が靈魂と密なる関係があるかどうかまでには及ばないにせよ、現に生きている我々の生き方を重要とする證空の思いからすると、このことが、また、我々衆生に内在する何かを考えることにおいても何らかの関わり得る点を持つのではないかと思われるのである。すなわち、證空の説く往生觀は決して臨終のものではなく、弥陀の絶対他力を理解することを抛り所として、その境地を即便往生と捉えるのであり、寧ろこの現生往生をより重視するのである。そして、この他力領解をしたものには、臨終までの間、機的能力に任せて現世でのあらゆる行の実践を積極的に修すべきことを勧めるのであるが、他力領解の機の肉体、或いは精神には現世に生きながらにして何らかの変化や変わり目があるのではないかと推測されるのである。このことに關して、證空は「述成」に、

本尊に向ひて念仏申し居たる二人あり。振舞は少しも替らねども自力他力の趣き同じからざるなり。自力の人は、如何にもして心も深く極樂を願はばや、仏構へて願ふ心をつけさせたまへ、欣ふ心も誠にあり、厭ふ心も等閑ならずば、なか迎え玉はざらんと思ふ間、信ずる心発る時は往生も近々と覚え、妄念発りて心ならぬ時は、往生も遠々と覚ゆるなり、といふ。是は世に道心もあり氣に見ゆれども本願には疎きなり。衆生のはげみより往生を願ひ出ださんと思へる故に、是亦、仏の大悲にも窮めて疎き者なり。

次に他力の人は、心に極樂を願ふ信心いたくおこらず、妄念すべて止まらぬにつけても、あら忝なの仏の願行や、五劫思惟の願が凡夫往生の願とならせずんば我等が往生は思ひぎりなん。我等が願行を成じたまへる忝なさよと拜む故に、夜もすがら念じ日ねもす唱ふれども、自力にはあらず、念々声々に他力の功德が円満するなり⁽¹⁷⁾。としている。つまり、本尊に向かい念仏する姿を第三者が見る時、他力領解を得た者と未だ未領解の者とは肉体的には何ら区別がつかないのであるが、この二人は決して同じではないと述べるのである。また、「觀經散善義他筆抄」

下において、

又或義ニ云ク、タトヒ口称ストモ、三心領解ノ心立タズンバ、是自力ナリ。三心ノ領解、願力ノ功ニ帰スル、是ヲ他力ノ行人ト云フト、云云。此ノ義然ラズ。タトヒ領解モ、口称モ、自ラ能ク領解シ自ラ能ク行ズト思ハバ、皆是自力ナリ。タトヒ解シテモ、称シテモ、帰入ノ一念ヲ得テ名号ヲ称スル、是ヲ他力ノ行人ト云フベシ。⁽¹⁸⁾

とも示すように、ここに言う他力の人とは、證空の言う弥陀の弘願による絶対他力の領解を得たものであり、至誠心等の三心（證空教学では領解の一心であるが）を具した者であるが、その領解を自らがその心に他力を領解したとの認識をし、称名等行うことでは未だ自力を出ない、真の他力領解とは言えないとするのであり、それ故、これとは反対の真の他力領解が得られたところの衆生には自らの意識を超越した別なる存在が第三者によって認められるのであり、このとき、現世に生きる我々衆生には、肉体と精神のみでは分析しきれない何かが潜在するのではないかと考えられるのである。そして、このものが靈魂であるとはいき切れないものの、これまで考えてきたように我々衆生が生死流転を繰り返すについても、浄土教の対象たる凡夫が往還二相の回向をなすにも、そこには常に意業が関係しているのである。しかしながら、ここに言う心とは先の「述成」において證空が言うように、穢土を厭う心も浄土を欣う心も、いずれも自身の心でありながら、単なる心ではないのである。ここに考え得る単なる心とは異なるもの、自らの意識を超越したところにある心、意識のようなものが、靈魂なるものを捉える手がかりとなるのではないかと考えられるのであって、それにはまた、證空が重んずる現世における即便往生が深く関わるものと思われるのである。

註

- (1) 西山上人短篇鈔物集 一六〇
- (2) 西山叢書 第一卷 九
- (3) 西山叢書 第一卷 一二
- (4) 西山叢書 第一卷 二一
- (5) 西山叢書 第四卷 六
- (6) 西山上人短篇鈔物集 一五四
- (7) 西山叢書 第四卷 五七
- (8) 西山叢書 第四卷 一三七
- (9) 西山叢書 第一卷 一〇
- (10) 西山叢書 第四卷 五六
- (11) 西山叢書 第一卷 二
- (12) 西山叢書 第三卷 三八
- (13) 西山叢書 第四卷 五五
- (14) 西山叢書 第三卷 一六
- (15) 西山叢書 第二卷 一九七
- (16) 西山叢書 第二卷 一四九
- (17) 西山上人短篇鈔物集 八七
- (18) 西山叢書 第六卷 一八七

